Parité

西東京市男女平等参画情報誌

パリテ

2014.10
Vol.13

特集

就職、結婚、妊娠
女性のためのライフプランニング

白河 桃子さん
（少子化ジャーナリスト・作家・相模女子大客員教授）

西東京市男女平等推進センター
パ リ テ

男女平等参画社会は、男女が共に
様々な分野で活躍できる社会です。
仕事も生活も楽しめる、
そんなライフスタイルについて
考えてみませんか。

contents

p6 パリテ INFORMATION
「103 万円の壁」
p7 パリテ・ライブラリー
ステキに男女平等参画！ in 西東京
「男の 子育て」編
p8 西東京市男女平等推進センター「パリテ」
企画運営委員 紹介

就職　結婚　妊娠

女性のためのライフプランニング

6月28日、住吉会館ルピナスで、西東京市男女共同参画週間事業として「婚活」の提唱者である白河桃子さんの講演が行われました。仕事と結婚、妊娠、出産といったキーワードを通して、これからの女性の生き方を考えるための貴重なお話が伺える機会となりました。

Profile

白河　桃子（しらかわ とうこ）

少子化ジャーナリスト、作家、相模女子大客員教授
経産省「女性が輝く社会の在り方研究会」委員
東京生まれ、慶応義塾大学文学部社会学専攻卒
婚活、妊活、女子など女性たちのキーワードについて発信する。山田昌弘中央大学教授とともに「婚活」を提唱。婚活ブームを起こす。女性のライフプラン、ライフスタイル、キャリア、男女共同参画、女性活用、不妊治療、ワークライフバランス、ダイバーシティなどがテーマ。
「妊活バイブル」共著者、齊藤英和氏（国立成育医療研究センター不妊診療科医長）とともに、東大、慶応、早稲田などに「仕事、結婚、出産、学生のためのライフプランニング講座」をボランティア出張授業。講演、テレビ出演多数。
著書：『女子と就活　20代からの「就・妊・婚」講座』『妊活バイブル晩婚・少子化時代に生きる女のライフプランニング』『婚活症候群』最新刊『「産む」と「働く」の教科書』

結婚ではもう食べていけません

つながっている仕事・結婚・出産

私は結婚していますが、子供はいません。産まない選択をしたわけではなく、知識不足などで時機を逃がしたという感じでした。だから、皆さんにお伝えすることは、若い時の自分に言ってあげたかった内容がベースになっています。

女性にとって、今最も重要なのは仕事です。結婚や出産がうまくいかないのにも、仕事の問題が大きく関わっています。仕事・結婚・出産はバラバラに捉えられがちですが、どれも一人の女性の人生に起こる、連続したものなんです。

現在、95年生まれの女性の5人に1人が生涯未婚で、3人に1人が一生子供を持たないと予測されています。しかし、女性が働くから子供が産まれないということはありません。スウェーデンなど多くの女性が働いている先進国ほど少子化を脱しています。

私が実施した女子大生へのアンケートでは、多くの学生が「早く結婚して早く産みたい」「仕事を続けたい」と答えました。「バリキャリ※」派もワーク・ライフ・バランスを取って細く長く働く「ゆるキャリ」派もいますが、ちゃんと働きたいと思っているんです。

ところが、そんな女性たちも、実際に働き出すと元気をなくしがちです。今の20代にはまだ「父親は仕事、母親は子供が小さいうちは子育て」という家庭で育った人が多いので、両方をやる自分の姿が想像できないのではないかと推測しています。既存のロールモデルはすごすぎますし、「どうせ産んだら男に負ける」という思いもあるでしょう。働くことの必要性がどこか腑に落ちていないんですね。でも、働くことは無駄ではなく、結婚や子育てにつながります。

「働く権利」を使おう

さまざまなプレッシャーを受け「働かされる」と感じている女性も多いことでしょう。しかし、私は「働く権利」というものもあると考えています。働いて自分の財産や老後の生活をつくる権利です。結婚ではもう食べていけません。働くことは最大のリスク回避策であり、子供や社会のためになります。だから、ぜひこの「働く権利」を使っていって欲しいと思います。

※ バリバリのキャリアウーマン

「産む」と「働く」のための4つのハードルを越える

現在、産みたい・働きたいという女性は大勢います。ところが、「産む」と「働く」という生き方を実現させるまでには、4つのハードルがあります。

ハードル1　産める体のメンテナンスと正しい知識

第1のハードルは、知識不足です。高校の保健体育で習っているはずなのですが、女子大生に質問してみても、自分の体や妊娠についての正しい知識が本当にありません。

これを改善するには、やはり教育しかないと思います。自分で学ぶのはもちろん、早いうちからなるべく専門家の話を聞くのがいいでしょう。普段顔を合わせている先生の授業では恥ずかしくて騒いだりする生徒たちも、医学的に揺るがない事実を示す専門家の話はちゃんと聞きます。

女性にとっては、自分の体を自分で守ることが非常に重要です。仕事などで忙しいからといって疎かにせず、健康な体を保つことが、妊娠につながっていきます。

社会としては、教育推進の他に、子宮頸がん検診などの女性医療の啓蒙がとても大事ですね。

ハードル2　結婚

第2のハードルは、結婚です。現在の日本では婚外子の割合はたった2%で、「結婚しないと産めない」という考えが根強く存在していますが、結婚したいと思っていても結婚していない人が多いのも実情です。

原因のひとつは、出会いの問題です。現在の独身者は恋愛において受け身で、男女ともアプローチを待っているだけの状況になっていますが、当たって砕けるのを嫌がらず、積極的にアプローチして欲しいなと思っています。

そして、最も重要なのは経済的な面の考え方です。多くの女性が働き続けるつもりでいるものの、もし働き続けられなかったら養って欲しいと思っています。しかし、20～30代の男性の年収は大きく下がり、不安定な雇用形態が急増しています。養って欲しい女性に対して養える・養う気のある男性があまりに少ないため、専業主婦を希望すると、相手はまず見つかりません。

専業主婦には、離婚や倒産・リストラ・減給といったリスクがあります。離婚した場合、養育費は8割が受け取っておらず、専業主婦が当たり前だった世代である65歳以上の女性は、離別や死別で一人になると、半分が貧困状態に陥っています。やはり、結婚後に一本の軸足だけで立つのは不安定だと思います。

私はいつも「結婚したい人は、まずしっかり仕事をして、自分で食べていける『自活女子』を目指そう」と伝えています。ライフイベントや自分の状況に合わせた形で働き続けるのが一番いいのではないでしょうか。子育てのために仕事のペースを落とすことはいつでもできますし、子育て前に一生懸命働いた経験は自分の財産になって、後で必ず役立ちます。

ハードル3　仕事と子育ての両立

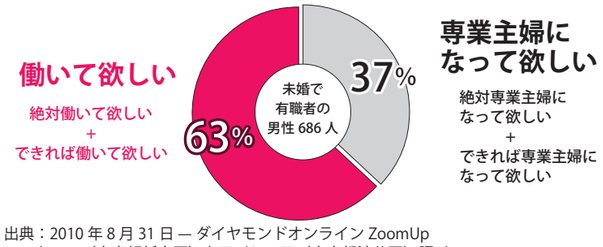
ライフイベントに合わせた働き方を

第3のハードルは、仕事と子育ての両立の困難さです。「勤務時間が合わない」「両立できる雰囲気がない」という理由で仕事を辞める女性が少なくありません。

働く女性には何度かターニングポ

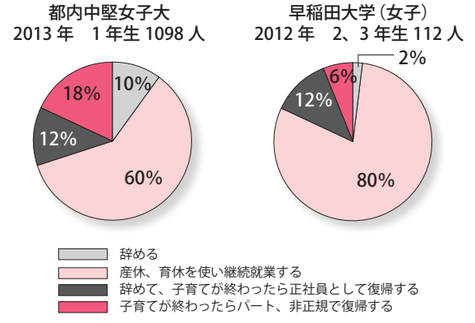
男子も望む女子の稼ぎ力

あなたの希望として、結婚し出産した後、妻に専業主婦になって欲しいと思いますか？



出典：2010 年 8 月 31 日 ― ダイヤモンドオンライン ZoomUp
ユーキャン（東京都新宿区）とアイシェア（東京都渋谷区）調べ

女子大生の希望〈出産したら仕事は？〉



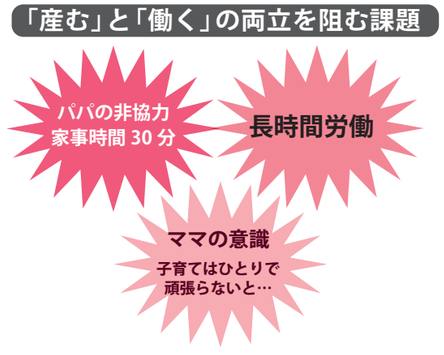
イントが訪れますが、大事なのは「男性の働き方に巻き込まれない」ことです。結婚前・出産前と同じように働けない期間が来ても、そこで挫けずに乗り切ることが大切です。

転職・復職をする時、専門性を持っている方は強いですね。専門性というのは資格に限らず、働きながらも身につくものですが、これからの専門性は掛け算です。例えば、英語なら英語だけではなく「英語」×「食の業界に詳しい」というように。女性はライフイベントに合わせて仕事が途切れることがありがちなので、専門性を磨いてキャリアを築くことはとても重要だと思います。

「共立」で乗り切る時代に

これからは仕事・家事・子育てを二人で分け合う夫婦が主流になっていくでしょう。社会も、そんな夫婦を基本とした仕組みをつくっていかなくてはいけません。しかし、日本の男性の家事・育児時間は非常に短く、生まれついてのイクメンはまだまだ少数です。だから、パートナーには身近なイクメンを見てもらうなどして、成長のきっかけをつくりましょう。お母さんたちの話を聞いていると、イクメンはとにかく褒めて、愛情をかけることで育っていくものなんだなと感じます。

現在の日本は、社会的不妊とも言える非常に産みにくい状況です。それを乗り切る答えは「共立」ではないでしょうか。家族が両親・祖父母や地域の人、保育園や学校の先生、仕事仲間といった多くの方々と共に立っていくというイメージです。子育ては自分だけで頑張らなくてはいけないと思っている女性も多いですが、男女とも働く時代ですから、周囲との協力は必須になるでしょう。



ハードル4 不妊治療

不妊治療にも限界が…

以上のハードルを若いうちに越えられなければ、加齢による不妊という第4のハードルが出てきます。日本の不妊の大半がこの加齢による不妊です。若いうちに結婚・出産がしにくい環境のせいで、日本は不妊クリニックの数と体外受精の件数が世界一多い「不妊大国」になっています。

このように「産む」と「働く」を難しくしている最大の問題は、日本企業の人材育成期と妊娠適齢期が重なっていることです。20代～30代前半は女性にとって妊娠に適した時期ですが、30歳で昇進試験を行うなど、企業は男性を想定したモデルで人材を育成しているのです。

卵巣内にある卵子は加齢と共にどんどん減っていき、妊娠の確率も急速に低下します。卵子の数は個人差が大きく、20代でも少ない方はいますし、40代でも多い方もいます。知人や芸能人がある年齢で産んだからといって、自分も産めるとは限りません。男性の年齢も無関係ではなく、やはり年齢が上がると妊娠の確率は下がります。生涯不妊率も、結婚する時期が遅いほど高まってしまいます。

不妊治療さえすれば何歳でも産めるというのは誤解です。成功率は意外に低く、それほど完璧なものではありません。どこまで治療をするかは、充分話し合って決める必要があります。男性に原因があるケースも多いため、不妊が疑われる際は男女とも検査に行くことが大事です。

欲しいものは自分で手に入れよう

私は著書で「就活」「婚活」「妊活」と書いてきていますが、それは、欲しいものは自分で意識して手に入れようと活動しなければ手に入らない時代だと思っているからです。お見合いなど、若い人を結婚させる仕組みが社会に用意されていた時代は終わりました。今は自分でチャンスを見つけて出会いに行かなければいけません。婚活はお見合いパーティーや合コンに行くということではなく、「受け身でいてはだめだよ」ということですし、妊活も不妊治療とイコールではなくて、「意志を持って授かる」ことだと考えています。ただ、妊娠は完全にコントロールできるものではなく、神様からの贈り物ですから、やはり「授かる」という敬虔な気持ちも必要だと思います。予定外の妊娠でも、もう責任の取れる年齢なのであれば「案ずるより産むが易し」かもしれません。

ワーキングマザーがつくり出す働く文化

全員が参加できる新しい働き方へ

私が取材してきた中で、仕事を辞めない女性の条件とは「働き続けるという強い意志を学卒時に持っていた」「仕事の喜びを知っている」「夫や職場が協力的である」などでした。また、復職できる女性はブランクが短めで、すぐに正社員ではなくても、とにかく働き始めていました。前職での人脈を維持しており、そこから誘いが来たという方も多かったです。

女性が働き続けるためには、働きやすい雰囲気や環境がとても大事です。それがあれば、当たり前のように働き続けている周囲のワーキングマザーの姿を見て、自分もやってみようと思う人が増えます。すでにワーキングマザーが短時間で集中して働いて業績を上げている会社もあり、大企業に限らず、中小企業でも社長次第では意外に産みやすい雰囲気が生まれていたりします。働き続けるための環境は、これからどんどん整備されていくでしょう。

これまでの日本の働き方は24時間働ける男性用の働き方でした。でも、そんな働き方では未来に対応できないと思います。これからは、働ける時間の制限がある、介護を抱えている、病気があるといったさまざまな事情の人たちが全員参加できるような働き方が必要です。ワーキングマザーは、そういった新しい働き方・働く文化をつくっていく人たちなのでしょう。

まずは女性から動き出そう

女性が働く覚悟をすると、さまざまな社会問題が解決します。結婚できるチャンスが増え、少子化・結婚難の解消につながりますし、GDPもアップします。また、高齢女性の貧困の防止になり、次世代の働く女性とパートナーの育成にもつながります。「働くのは当たり前だよね」という女の子は、やはり「働くのは当たり前だよね」という両親から生まれてくると思います。だから、お子さんを保育園に預けていっぱいいっぱいで働いている方も、なるべく働き続けて欲しいですね。そうやって次世代の働く女性をつくっている方々には、本当に感謝しなくてはいけません。

共働きが当たり前の社会になるには、当事者である女性に加えて企業・政府も動いていく必要があります。しかし、なかなか難しい面もあるため、まずは女性自身が変わっていくことが大切だと思います。一年一年進んでいく女性の体の事情は、社会のシステムの変化を待っていられません。だからこそ、まず女性から動き出し、女性のために企業や政府も動き出すという三位一体の動きが重要なのではないでしょうか。

～参加者感想（抜粋）～

- これから女性が働き続けることが当たり前の社会になっていくので、自分の子供にもそういった背中を見せてあげたいと思いました。
- 制度等、政府のできることは整っていて、あとは、地域ごとのサポートだと考えています。いつ産んでもやっていける、安心できるサポートの充実を求めています。
- 4月から仕事復帰して自信をなくしている時期でしたが働き続けることの勇気をいただきました。
- “女性の人権”をしっかりおさえ、かつ分かりやすい講座でよかったです。もっと若い女性たちに子育て・教育・食の問題・性の問題を教えてあげないと、日本人の質が下がってしまうのが心配です。
- 選択する自由があっても、情報がなく、自己決定の機会を失ってしまった女性が多いと思いました。

♣ 西東京市相談窓口 ♣

相談内容	担当課・組織	連絡先
女性相談	協働コミュニティ課	☎ 042-439-0075
就職活動	西東京市地域職業相談室	☎ 042-464-1860
保　育	保育課	☎ 042-460-9842
ファミリーサポート	西東京市社会福祉協議会	☎ 042-438-4121
学童クラブ	児童青少年課	☎ 042-460-9843

パリテ INFORMATION

103万円の壁

「もうすぐ103万円だから、シフトを減らさなくちゃ」――身の回りで、そんな言葉を聞いたことはないでしょうか。今、配偶者に扶養されている人が働く時には「103万円の壁」があると言われ、年収を103万円以下に抑えて働くことにメリットを感じる人がいる反面、賃金の上昇が妨げられ、もっと働きたい女性の活躍が阻まれているとも考えられています。

妻(本人)から見た103万円

「103万円の壁」は、本人と配偶者の両方に関係します。平均的な年収のサラリーマンである夫とパートのみで収入を得る妻の世帯の場合、まず、妻(本人)は年収が103万円以下なら所得税を払う必要がありません。これは、税額を計算する時に「基礎控除」と「給与所得控除」という控除が適用されるからで、103万円とはこの二つの合計です。年収が103万円を超えると、妻はその超えた部分についての所得税を払うことになります。

夫(配偶者)から見た103万円

一方、夫(配偶者)は、妻の年収が103万円以下なら「配偶者控除」という控除によって所得税が安くなります。しかし、103万円超～141万円未満では適用される控除が「配偶者特別控除」となり、103万円以下では一定だった控除額が妻の年収の増加に応じて減っていくため、夫はそれまでよりも所得税が増えることになります。

また、勤務先が配偶者手当等を支給している場合は、妻の年収の条件を配偶者控除に合わせて103万円以下としていることが少なくありません。妻の年収が103万円を超えて手当がなくなると、妻の年収が増えた以上に夫の年収が減り、世帯全体としての収入がさがってしまうこともあります。

時代に合った制度へ

配偶者控除がつくられたのは1961(昭和36)年のことで、この制度には、サラリーマン世帯と自営業世帯との税金のバランスを取るという目的がありました。家事や育児など、家庭での妻の働きを評価したとも捉えられています。その後、1987(昭和62)年には、配偶者控除を補う形で配偶者特別控除がつくられました。しかし、これらは「夫が外で働き、妻が家庭を守る」という世帯を想定しており、現在の社会の状況に合わなくなっていることから、見直しが検討されています。

「103万円の壁」をキーワードに、自分の働き方やこれからの社会について、改めて考えてみてはいかがでしょうか。

Parité Library パリテ・ライブラリー

このコーナーでは、男女平等参画をはじめとする様々なテーマの本を紹介します。
男女平等推進センター「パリテ」の書庫で貸し出していますので、ぜひご活用ください。

チャイルド・プア ~社会を蝕む子どもの貧困~
著　者：新井直之
出版社：ティー・オーエンタテインメント

見えない貧困問題と言われている子どもの貧困。〝今の〟日本の子どもたちのリアルなケースを見える化し、自分の本当の想いや声を発信することすらできない子どもたちに代わってあるのがこの本。手にとってみれば、そこに女性の貧困問題もより重く感じるのと同時に、自分の子どものように大切にしたくなる本です。

女子会2.0
編　者：「ジレンマ＋」編集部
出版社：NHK出版

NHKのTV番組「ニッポンのジレンマ」のウェブサイト「ジレンマ＋」公開の座談会と論考で構成された「女子会」。語る面々は千田有紀さん、水無田気流さん、西森路代さんと黒一点で挑んだ古市憲寿さん。白河桃子さん、石崎裕子さんの論考も加わって現代の「女子」たちの生きづらさがリアルに伝わる。

「産む」と「働く」の教科書
著　者：齊藤 英和、白河 桃子
出版社：講談社

今は、女性の生き方が難しくなっている。就職し、結婚し、妊娠するという一連の流れが、自然にはできにくく、意識して行動しないとできないと著者は説く。
大学生女子だけでなく、全ての人に読んでほしい。

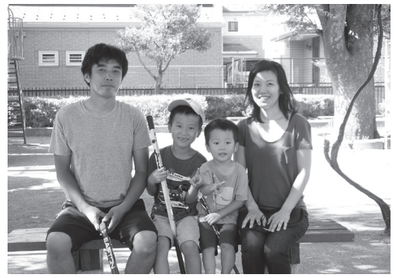
ステキに男女平等参画！ in 西東京

「男の子育て」編

No.1

中村竜洋さんは、学生時代の競技経験を生かし、毎朝近所の公園で長男の駿太君(6歳)と次男の奏介君(3歳)にアイスホッケーを教えています。パートナーの友美さんは「良いコミュニケーションの時間になっていますね。子どもたちもお父さんが大好きですよ」と笑顔を見せます。

竜洋さんは、子どもの誕生をきっかけに働き方を見直し、時間の融通が利く形に変えました。収入を最優先にするのではなく、子どもと接する時間を作りたいと思ったそうです。



▲「毎朝、私が食事の支度や洗濯をしている間に、子どもと公園へ練習に行ってくれるので、家事がはかどりとても助かってます」と友美さん

▲お父さんとパスの練習をする駿太君と奏介君

「今の生活には満足していますが、仕事の効率は上げていきたいですね。一生懸命働くのは良いことですが、家庭とのバランスも必要です。家族とたくさんコミュニケーションを取れた方が楽しいし、仕事を応援してもらえると、もっとやりがいを持って働けるのではないでしょうか」と話す竜洋さん。練習が終わった後、子どもたちを幼稚園に連れていくのも大切な日課となっています。

西東京市男女平等推進センター「パリテ」
企画運営委員 紹介

26年・27年度企画運営委員の皆さん(左から) 長坂悠、田崎吉則、吉田朋子、白井香澄、齋藤三枝子、本橋里実、加藤眞理、齋藤博

男女平等参画社会を推進する学習、情報発信、交流の拠点である男女平等推進センター(パリテ)の企画運営は、公募による8人の市民委員によって進められています。今年6月6日に任期満了による交代があり、公募により2年間の任期で新たに8人の委員が選出されました。

企画運営委員会の活動内容

年8回程度の会議を開催し、6月の男女共同参画週間、11月の女性への暴力反対週間に行う講演会と男女平等への意識啓発のためのパネル展示や年間を通しての講座等の企画立案をしています。また、年2回の情報誌パリテの発行など、西東京市の男女平等参画事業を推進するための活動を行っています。

男女平等推進センターパリテでは、市民の皆さんに事業を通して男女平等への理解を深めていただき、身近で気軽に利用していただけるセンターの運営をしていきます。

団体登録
(男女平等推進係)

男女平等参画社会の実現をめざして活動するグループを支援します。
団体登録をしていただくと、次のとおり施設をご利用いただけます。

活動室

グループ活動や、活動の際の保育室としてご利用いただけます。(無料)

- 登録団体は2カ月前(その他の方は1カ月前)から予約申し込みができます。
- 利用時間　午前9時～午後10時

団体連絡箱

グループで作成したチラシなどを配布できるロッカーです。申請をしていただくと、ご利用いただけます。

Parité
パリテ
2014.10
Vol.13

愛称「パリテ」とは…
フランス語で"平等な"という意味です。

◆企画・編集◆　男女平等推進センター企画運営委員会
◆発　　行◆　西東京市生活文化スポーツ部
協働コミュニティ課
〒202-0005
西東京市住吉町6-15-6 住吉会館内
☎ 042-439-0075

◆企画運営委員会委員◆
加藤眞理、齋藤博、齋藤三枝子、白井香澄、
田崎吉則、長坂悠、本橋里実、吉田朋子

◆制　作◆　株式会社ドゥ・アーバン

▶ご意見、ご感想をお寄せください。情報誌「パリテ」は西東京市のホームページからもご覧いただけます。
http://www.city.nishitokyo.lg.jp

Access

編集後記

連日のように、女性への暴力や児童虐待などの事件が報道される中、男女平等推進センターパリテの果たす役割はますます重要となっています。企画運営委員会の一員として、責任感をもって活動したいと思っています。
齋藤三枝子

今回の特集は、白河桃子さんということで、講演をお聞きになれなかった方は、ぜひ、本誌で内容を読んでいただければ、企画者として嬉しいです。女性のライフプランの特性を男性にも知って欲しいと考えています。
田崎吉則

女とか男とかの前に、1人の人間として、働くことは息をすることと同じだと思わない?女だから男だからの前に、親になることは生きることだと思わない?大人の女なら、案ずるより産むが易し。絶対に、会社だけは辞めないで!
本橋里実

今年度より委員を務め、パリテの事業を多くの方に知っていただくよう情報誌作りや企画に参画します。今号の特集では女性の生き方を「攻め」の姿勢でとらえ、「働く」ことへの自信を持つことができました。
吉田朋子

R70
古紙パルプ配合率70%再生紙を使用